○四国のイヌコリヤナギの分布についての疑問（山中二男） Tsugiwo YAMANAKA: *Salix integra* Thunb. in Shikoku

イヌコリヤナギ (*Salix integra* Thunb.) は日本列島に広く分布し，四国にもあることになっている。新しいところでは，北村四郎・村田 源：原色日本植物図鑑 木本編 II (1979) や北川政夫改訂・大井次三郎：新日本植物誌 顕花篇 (1983) にも産地に四国が入っている。

しかし私自身は，明らかに自生と思われるイヌコリヤナギをまだ四国では見ていない。かなり長い間よくしらべたつもりの高知県でも不明であるし，また近年出た愛媛県と香川県の植物目録にも記録がない。ただ，Horikawa, Y.: Atlas of the Japanese Flora 2: 514 (1976) には徳島県南部に点があり，自生の可能性を否定できないものの，まだ確かめることができない。徳島県の植物にくわしい阿部近一氏も，県内には野生化したコリヤナギはあるが，イヌコリヤナギを見たことはないと言っている。

こうなると，イヌコリヤナギの四国における自生ははなはだ疑問である。もっとも，今すぐ軽卒に無いとは断言できないし，またかつて自生していたが，環境の変化などで絶滅したことも考えられないわけではない。それと，イヌコリヤナギがあってもよいような土地には，ほかに分布や生態から興味のある植物もあるから，そうした意味からも，これからさきもっとよくしらべてみる必要がある。たとえば，徳島県海部町にはチョウジソウ (*Amsonia elliptica* Roem. et Schult.) があり，そこからほど遠くないことところには，クサナギオゴケやビロードイチゴが見られる。また，香川県綾歌町のア



図 1. 栽培されていたコリヤナギ（高知県日高村）.

カマツ林の多い低地には，ヌマガヤ (*Moliniopsis japonica* Hayata) が生えていたりする。イヌコリヤナギも，どこかにあるかもしれない。

四国でも，ときにイヌコリヤナギを栽培しており，また近ごろは花屋で見ることもある。そのため，これからさき，ところによって半野生状になることがないともいえない。

なお，コリヤナギの栽培は，以前は四国でも珍しくなかった。高知県日高村では今なおそうとう広い範囲にそのおもかげが残っているが，まったく放棄されたままであるから，見かけは湿地にできた自然のヤナギ林のようになっている。宮脇昭編：日本植生誌四国 (1982) にヤワラスゲ―イヌコリヤナギ群落として出ているのは，このコリヤナギ林（図1）である。

要するに，ここでの結論は，私の知るかぎりイヌコリヤナギが現在四国に自生しているという確かな証拠はないことである。　　　（高知大学 教育学部生物学教室）

□Dassanyake, M. D. & F. R. Fosberg (ed.): **A revised handbook to the flora of Ceylon**, Vol. 4, 532 pp. 1983. Amerind Publ. Co., New Delhi. スリランカのフロラの第4冊目である。Anacardiaceae, Begoniaceae, Apocynaceae, Asclepiadaceae, Periplocaceae, Avicenaceae, Nyctanthaceae, Symphoremaceae, Verbenaceae, Campanulaceae, Lobeliaceae, Burmanniaceae, Zingiberaceae の13科が記されている。多くの聞きなれない科があるけれど，これは細分された科を使っているためで，Periplocaceae は一般にはAseclepiadaceae として扱われており，Aviceniaceae, Symphoremaceae は Verbenaceae として，Nyctanthaceae は問題はあるけれど Verbenaceae の一員として扱われることが多い。日本に関係のあるものとしてはヒルギダマシ，タイワンウオイサギなどがくわしく述べられている。　　　（山崎　敬）

□小川　真：**きのこの自然誌**　244 pp., 26 figs. 1983. 築地書館，東京. ¥1,800. 大見出しは，I. きのこの形，きのこの成長，II. 毒きのこ，薬になるきのこ，III. 胞子の世界，IV. 菌糸・菌根のこと，V. きのこの栄養のとり方，VI. きのこの分布；きのこの生態，附・きのこと菌類学。著者は既に多くの著書を出しているので，手なれた手法でこの随筆を進めている。2～3の例を挙げると，雷の落とし子，ユダの耳，マツタケ前線は南下する，笑うきのこ，聖なるきのこ，運び屋のなめくじ，ブタの好物，居候，ヒョウタンから駒，等々である。読んでいて笑ったり，成程と感心したりで，一杯やりながら頁をめくるには真に相応しい。著者は京都大学農学部で伝統のマツタケの人工栽培に取組み，実験室では既に培養に成功して居り，10年後には野外で大量に栽培出来るというから，我々は楽しみにしてこれを待つことにしよう。　　　（小林義雄）